すいばこ 未知から標町

第五十三弾
ある男が実現した、十六年前の希望

滋賀県高島郡朽木村、小川。京都・滋賀の境にあるこの場所で、ひとりの男が自分の夢を実現させた。人と自然との出会い展…『未来の大人たち』にとって、いつかこの場所は想い出の『すいば』となるにちがいない。

文／三村　渓・写真／大田　メグミ

東京には山がない。

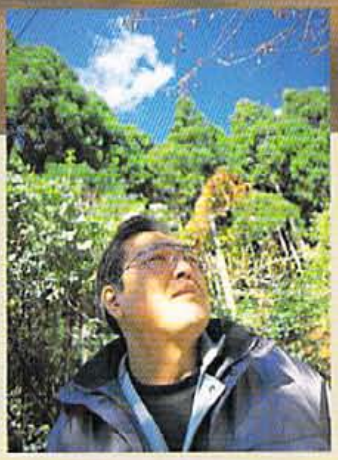
夜明けに首都高速を走ってみれば、それはみごとな光景に出会う。東の空から黎明の閃光がかがやく瞬間、みわたすかぎりのビルの群れがシルエットとなって浮かびあがり、地平線をつくるのだ。

そんな都心に、一級建築士として建築事務所に勤務するひとりの男がいた。その名を井出章雄という。子どものころから自然に親しんできた彼は、東京での生活にすこし息苦しさをおぼえていた。仕事の合間、ときおりたずねる渓流や山に休息を求める日々。今から思えば、『決意』の伏線はそのときすでに引かれていたのかも知れない……

それまで渓流釣りをしたことはなかった。だが、東京で暮らす間にすっかりと「ハマって」いた。多摩川上流は今もメッカであるが、まず、そこで腕を研いた。やがて雑誌を買い漁り、穴場を求めて遠征がはじまる。だが、情報どおりには釣れなかった。穴場と紹介される所の九〇%は「かつての」という文字がヌケ落ちているのであり、残り一〇%は釣りをする前にハーケンやザイルの使い方をマスターしなければならなかった。

感激のイワナを手にしたのは長野県。それからは岩手県など東北地方へ出かけることも多くなった。全雛日に夜行列車へ乗り込み、日曜に帰るわけだから、立派な小旅行である。釣り師の数と穴場の数は反比例するという、しごく当然な理屈に気づいたのだ。

四年間の東京本社への転勤が終わり、大阪へ帰ると、設計の仕事もかなりいいものを任



井出章雄プロフィール
昭和二十四年・大阪市出身。大阪市立大学工学部建築学科卒業。一級建築士として昭和五十三年まで建築事務所に勤務。その後、独立して渓流魚センターを開業しようと決意。滋賀県高島郡朽木村小川へ移住する。当初は山の麓にぽつりと開業した釣堀を、十六年がかりで宿泊施設や四百人収容のバーベキューコーナーなどを備えた朽木渓流魚センターへと発展させた。今では知る人ぞ知る、異色の人物。

せられるようになる。自分で仕事の流れや動きを決め、やりたいようにできた。そして、するべきことはみんなやり遂げてしまったような気分になってしまった。

「どれだけ成果をあげても、所詮は会社組織の一部である、という気持ちもつよくなっていました。もちろん仕事は充分に評価されましたが、自分ががんばった分がそのままダイレクトに反ってくるような生き方がしてみたくなったんです。

それに、もともと魚が好きだった。子どものころ、ちいさなタモ網をもって淀川へ行き、鮒などの小魚をよくすくったものです。大きくなるとそれが鯉釣り、鮒釣りにかわった。やがて釣りではまどろっこしくなって、とうとう投網をつかうようになった。高校を卒業して、もう、大学生になってたヨなあ。投網は高価なので大学生になるまで買えなかったんですよ。だから、社会人になって渓流釣りにのめりこむ素質は充分にあったわけです。それで、今度は自然の中で、好きな魚を相手に商売をしてみたいなあ、とね…」

こうして井出さんが会社を退職したのが十八年前。周囲からはかなり反対されたが、気持ちはかわらなかった。

では、どうして朽木村を選んだのか。魚の養殖、ということだけを考えれば石川県や福井県の山中でもよかった。が、それでは生計をたてるメドもつかない。お客さんに楽しんでもらう釣り場や施設をつくってこそ、商売になろうというものだ。

渓流釣りといえば、ヤマメ・アマゴ・イワナが主な対象魚となる。しかし、深山幽谷に住む魚となれば、イワナに限定される。北陸や東北、北海道で、時にはハーケンやザイルをつかい命がけで源流に挑み、釣られるのがイワナ狩に大物という魚なのである。だから井出さんも、相手にする魚は最初からイワナと決めていた。しかし、この魚は水温の高いところには棲息しない。都会に近くなるほど、川の水はゆるんでくる。適切な温度の水があり、お客さんを呼べるくらいの距離で開業することが必要だった。京都・滋賀・大阪をにらんで選んだというこの場所は、冬になると雪が一メートル以上つもる。条件は整っていた。

意気込んではじめてはみたものの、当初は山の端にさしわたし五メートルくらいの池と、木でつくったちっちゃな食堂があるだけだった。そこに釣堀、と看板をかかげた。魚は、買ってきて池にはなした。お客さんは？

「五人くらい、のぞきに来てくれたのかなあ。ぽつり、ぽつりとね。さっぱりでしたワ。アハハ……」

それでも自分でユンボを運転して、池や人工の川をすこしづつふやし、ひろげた。木も一本一本、自分で植えた。不思議なもので、体裁がそれなりに整いはじめると、訪れる人も増えた。蟻が砂つぶをはこぶような作業の中で、養殖池の魚たちもにぎわいをみせるようになった。

現在ではそれぞれの養殖池で卵から孵化するイワナが二十万匹。アマゴも七万匹が孵化している。さらに成魚を年に四、五トンは仕入れているという。年間での来客数がおよそ四、五万人。自家養殖だけではおいつかないのだ。

ここまで大きくできたのは、グループ釣り場やバーベキューコーナーを設けて、家族やグループ、団体客を呼べるようにしたことにある。実際、このふたつはたいへん好評だ。たとえば、グループ釣り場を申し込めば、一定の区画を貸切り状態にすることができる。しかも、釣れない魚は水を抜いて最後の一匹までつかみどりだ。すこし解説しておくと、貸切り状態になる区画は池ではない。人工ではあるが、ところどころ石で仕切られた川の、一部分の水が抜けるのである。子どもに人気のこのしくみは、関西でもはじめてのこころみだという。丸太でつくったバーベキューコーナーも四百人収容の大きさだ。

昨年は真新しい宿泊施設も完成した。三十人くらいが泊れる、その一階の入り口は食堂になっていて、さまざまな料理をたのしめる。特に、イワナの唐あげが旨い。

人工渓流釣り場の上はすぐ山になっていて、釣り場や養殖池の水をみたす、細い渓流がながれている。そこに魚を放流してもらって、釣りをたのしむ人もいる。すこし本格的に釣りをしたい人たちの遊び場だ。

ここは渓流釣りのマニアのための場所ではない。しかし、日帰りで自然を満喫したい人々の間では、今、ちょっとした「すいば」となっている。

井出さんに今の心境をたずねた。ここまで成功してよかったですね、との問いかけに、

「うーん。よかった…のかなァ…。ぜいたくなようだけど、希望は、希望であるから、きっといいんだろうなァ。ホラ、子どもたちがたくさんいるでしょう。ちっちゃな手で貸し竿をもって、笑ってる。魚は好きだけど、ああいう顔をみるのが、今はたのしいねえ」

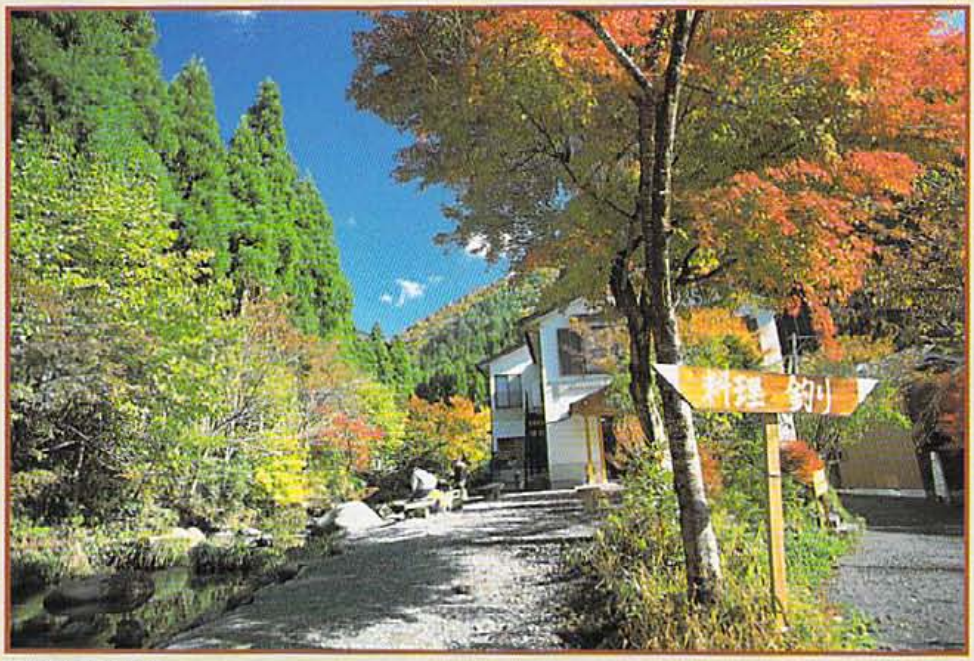
大きな背中のむこうで、

「オレもちいさいとき、あんな顔してたんやろなァ…」

と、つぶやくような声が聞こえた。

未来の渓流釣り師？

これはフライフィッシング用の池。うまくすれば四〇センチ級の大物が釣れるそうだ。



朽木渓流館前の木立

炭をおこす親子。

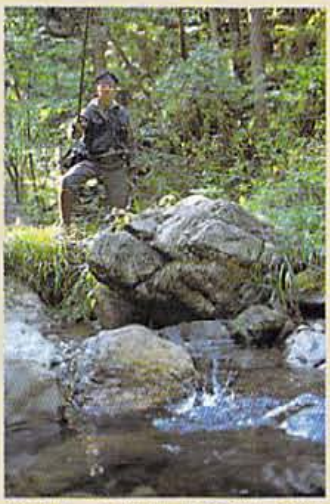
人工渓流釣り場の遠景。向こうに見える屋根はバーベキューコーナー。

釣りの後はバーベキュー。家族づれがにぎわう。

希望は、
希望であるから
きっといいんだろうなァ。
ホラ、子どもたちが
たくさんいるでしょう。
ちっちゃな手で
貸し竿をもって、笑ってる。
魚は好きだけど、
ああいう顔をみるのが、
今はたのしいねえ。

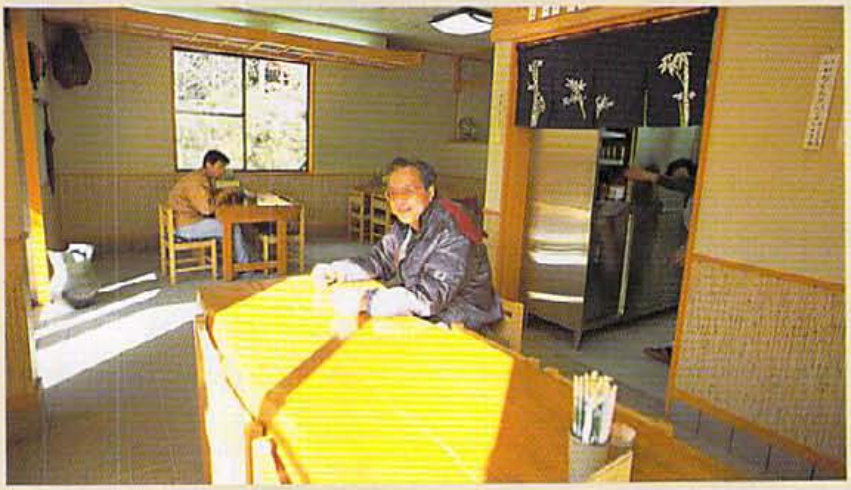
山の渓流釣り場で。シーズンオフの釣師はこちらで遊ぶ。セオリー通りの「竿の握り方」に注目。

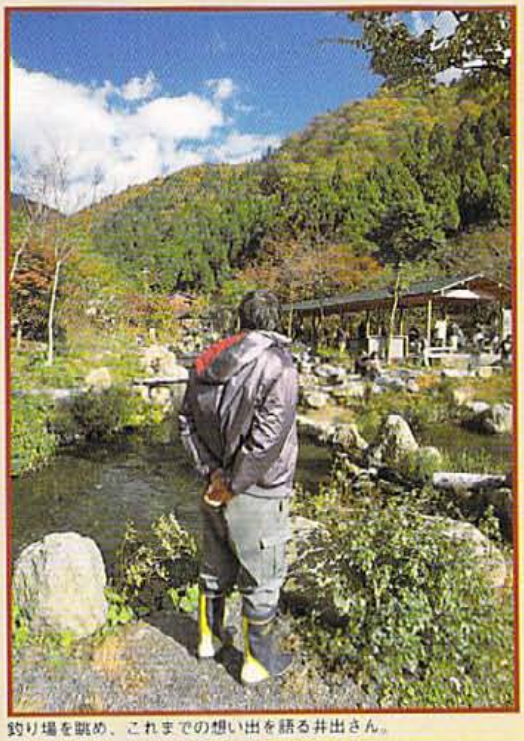
ホーラ。イワナを釣りあげたゾ。


これもヒットの瞬間。手前の水しぶきは魚のもの。

同じく山の釣り場。ヒットの瞬間。

渓流館の中の食堂で。




釣り場を眺め、これまでの想い出を語る井出さん。

井出章雄さん。

朽木渓流館(宿泊施設)の前で、奥さんと。

■朽木渓流魚センター
滋賀県高島郡朽木村小川
0740・38・5034